

勝田高校図書館だより

平成30年度 第10号

平成31年1月31日発行



一月のうた (評論)



「平成最後の」年明けから、もうひと月が過ぎようとしています。催しが一つ行われる度に、何度この言葉を耳にしたことでしょうか。皆が平成の時間をかみしめているのか、単なる挨拶代わりなのかは分かりません。けれども、時間は留まることなく流れていきます。年の終わりばかりでなく今の時期も、時間の流れを肌で感じます。特に今年は一つの節目を前に、時間というものが強く意識されるのかも知れません。時間が「見える」という経験は、若いときにはなかなか味わえないものですが、今私たちの誰もがその場に立ち会っているようです。

センター試験も終わり、3年生も一つの区切りを迎えました。明日からは自由登校期間に入ります。一人一人私立・国公立の個別試験に向かうときです。節目をどう乗り越えたかは、その後の人生に対する自信を左右すると思います。最後まで力を抜かず戦ったという実感を持った人は、次に困難に出くわしたときも、「自分はやり抜くことができる」と思えるはず。自信を胸に卒業式を迎えられるよう祈っています。1・2年生は、いよいよ今年度を振り返り、次年度の助走に入る時期ですね。自信を持って次のステップを踏み出せる助走をしたいものです。

図書館も、春を迎える準備が始まっています。時間に余裕がある人も、気が急ぐばかりで落ち着かない人も、いつでも足を運んでください。季節を感じる書籍も並んでいます。一年で一番寒さが堪える季節、図書館で少しだけ心を温めていきませんか。

★図書館からのお知らせです。★

- 12月のカウンター当番だった2年生の図書委員が、各々「気になるニュース2018」を紹介しています。昇降口正面の掲示板に年末から掲示しておりますので、是非お読みください。皆さんも気になった記事を、それぞれの視点で取り上げているかも知れませんよ！①
- 「節分」や「バレンタインデー」関連の本を展示しています。②
- 「本屋大賞」にノミネートされた作品を紹介しています。気になる本があったら、是非手に取ってくださいね。
- 新着本が入荷しています。

①



②



「節分」とは、大晦日の夜に宮中で行われた悪鬼を追い払う中国伝来の儀式「追儺(ついな)」が、民間に伝わったものです。「鬼やらひ」「儺やらひ」とも言います。『源氏物語』でも「紅葉賀」の巻に、元旦に参内しようとした光源氏が幼い姫君(若紫、後の紫の上)の部屋をのぞくと、姫君は難遊びの道具類を広げており、光源氏に向かって「儺やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」と真剣に言う愛らしい姿が描かれています。「犬君」とは、「若紫」の巻にも登場した姫君の遊び相手の女童です。「鬼やらひ」の真似をして、姫君の大事な難遊びの道具を蹴散らしてしまったようです。子供があとけない様子で、悪鬼を追い払おうとしている姿が目に見えます。今でも、豆まきをしながらするのは幼い子供かも知れません。では、追われる「鬼」とはどのような存在なのでしょう。「追儺」で祓うのは「疫神・悪鬼」、つまり邪気ということでしょう。一年の最後の夜に邪気を全て追い払って、新年を清浄な状態で迎えようとする気持ちが表れた行事です。

ところで、歌人としても知られる馬場あき子に『鬼の研究』という評論があります。その第一章「鬼の誕生」の中で「鬼」の造型化について述べている部分を紹介しましょう。

…「鬼」字のよみが日本で「おに」というよみ方に落ち着くまでには意外に長い時間がかかり、…「鬼字」にふさわしい和訓をめぐって、「おに」と「もの」とはなかなか決着がつかなかった。…しかし、そうしたなかにも、しだいに両者の区別は分明にされてゆき、「もの」の方は明瞭な形をとともなわぬ感覚的な霊の世界の呼び名に、「おに」の方は、目には見えなくても実在感のある、実体の感じられる対象にむけての呼び名にと定着してゆく。…「おに」の方はしだいに形象化され、憎悪と不安とのなかに、なぜか不思議な期待を持たれつつ成長する時期を迎える。そして、こうした趨勢のなかで、「おに」と微妙な離合をくり返しつつ、しだいに「かみ」は「おに」から分離して、これもまた別個の体系をなしていったのである。

〈中略〉

それにしても、鬼とは群聚するものであろうか。どうもそうではなさそうな気がする。…その心は「鬼哭」の語の存するのをみてもわかるとおり、孤独な切迫感がみちている。その祀られず慰められなかった死者の心は飢えており、飢えが或る時、怒みや憤りに転化しないものではない。その飢えはさまぎまで、けっして同じくしうものではないゆえに、鬼はつねに孤独であり、時には孤高でさえあるのだ。

(馬場あき子『鬼の研究』「第一章 鬼の誕生 3 造型化のなかの鬼」より)

これは、論の入口からの引用ではありますが、鬼の本質に触れている気がします。絵に描かれた鬼の姿、恐れられ人に害を為す鬼の物語、桃太郎の鬼退治…悪者であり、まがまがしく不吉な出来事や存在の象徴としてとらえられがちな鬼ではありますが、一方で『泣いた赤鬼』のような童話もあります。それだけ私達の身近に鬼は存在し、無意識に共存してきたということでしょう。更には、私達自身の中にも鬼は棲んでいるのです。鬼を恐れず厭わず、また鬼に囚われず、孤独に耐えて厳しい冬も乗り越えていきたいと思えます。

